

千里大久保遺跡 1

— 千里大久保遺跡第1次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1334集

2018

福岡市教育委員会

S E N R I O O K U B O

千里大久保遺跡 1

—千里大久保遺跡第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1334集



遺跡略号 SNO-1
調査番号 1615

2018

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市は、豊かな自然環境と地理的条件に恵まれ、古くから大陸との文化交流の門戸として発展してきました。福岡市内には数多くの歴史的・文化的遺産があり、それらを保護し、後世に伝えることは、現在に生きる私たちの責務であります。本市では、近年の著しい都市化の中でやむを得ず失われていく埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存を行うことによって後世まで伝えるよう努めています。

本書で報告する千里大久保遺跡周辺には、国指定史跡今宿古墳群をはじめ数多くの古墳が存在しています。今回の調査でも、古墳3基をはじめとして、弥生時代の住居跡等を確認し、この地域の歴史を解明していく上で貴重な発見となりました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、ご協力とご理解を賜りました事業主様はじめ関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例言

1. 本書は、福岡市西区大字千里大久保85-1地内において、太陽光発電所設置工事に伴い、福岡市教育委員会が平成28(2016)年7月6日から平成28年7月23日にかけて発掘調査を実施した千里大久保遺跡第1次調査の報告書である。
2. 発掘調査および資料整理・報告書作成は、国庫補助事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、池田祐司、大森真衣子、加藤良彦、坂口剛毅、細石朋希、吉田大輔が行った。1号墳出土人骨の出土状況実測図の作成、人骨の取り上げ・クリーニング・写真撮影は福岡市埋蔵文化財センターの上角智希(現:埋蔵文化財課)に依頼した。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成・写真撮影は吉田が行った。3号墳出土鉄刀のクリーニング、X線写真撮影は福岡市埋蔵文化財センターの松園奈穂が実施した。
6. 本書に掲載した挿図の製図は、吉田が行い、林由紀子の協力を得た。
7. 本書で用いた方位は磁北で、真北より6°21'西偏する。
8. 調査で検出した遺構については、堅穴住居をSC、土壙墓をST、土坑をSK、溝をSD、柱穴・小穴をSP、その他をSXとし、通し番号を付した。古墳については、1~3号墳とした。
9. 本書に関わる記録類・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されるので活用されたい。
10. 本書の執筆および編集は吉田が行った。なお、出土人骨に関する記述は、上角が執筆し、吉田が加筆した。

遺跡名	千里大久保遺跡	調査次数	第1次	遺跡略号	SNO-1
調査番号	1615	分布地図図幅名	121飯氏	遺跡登録番号	2892
申請地面積	9.948.67m ²	調査対象面積	950m ²	調査面積	593m ²
調査期間	平成28(2016)年7月6日~7月23日	事前審査番号	28-2-215		
調査地	福岡市西区大字千里大久保85-1				

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	4
1. 調査の経過と概要	4
2. 遺構・遺物	5
1) I区1号墳	5
2) I区2面	13
3) II区2号墳	16
4) III区3号墳	17
5) 試掘調査出土遺物および表掲遺物	22
IV. 結語	22

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/4,000)	3
第2図 洋菓子置き場および周辺測量図 (1/1,000)	4
第3図 I区 1号墳丘置き場および地山整形図 (1/150)	6
第4図 1号墳第1主体部実測図および墳丘・風土被断面図 (1/30 - 1/60)	7
第5図 1号墳第2主体部実測図 (1/30)	7
第6図 1号墳丘北側遺物包含層出土遺物実測図 (1/3)	8
第7図 I区 第2面 (1号墳墳丘下) 遺構配置図 (1/150)	9
第8図 S C 07 実測図 (1/40)	10
第9図 S T 04・05・06・10 実測図 (1/30)	11
第10図 S T 09 実測図 (1/10)	12
第11図 S K 08・12・13 実測図 (1/30)	12
第12図 S T 09・S K 08・SX13 および墳丘南側トレンチ出土遺物実測図 (9・10は1/1, 11は1/3)	13
第13図 II区 2号墳丘置き場および地山整形図 (1/150)	14
第14図 2号墳主体部実測図および周溝土層断面図 (1/30)	15
第15図 II区 SX 0 3 実測図および出土遺物実測図 (1/10・1/3)	16
第16図 III区 3号墳丘置き場および地山整形図 (1/150)	17
第17図 3号墳主体部実測図および出土刀実測図 (1/30・1/4)	18
第18図 III区 SK01・02 実測図 (1/30)	19
第19図 試掘調査出土遺物および表掲遺物実測図 (1/3)	20
第20図 試掘調査出土遺物および表掲遺物実測図 (20は1/8, その他は1/3)	21

図版目次

図版1

- (1) 調査前の状況 速景 (北西から)
- (2) 調査地全景 (南東から)
- (3) II区および西側斜面 (北西から)
- (4) 西側斜面および谷筋 (南東から)
- (5) I区1号墳および周辺検出状況 (南東から)
- (6) S T 05 検出状況 (南東から)
- (7) S T 04 検出状況 (北西から)
- (8) S T 04・06 完報状況 (北東から)

図版2

- (1) 1号墳第1主体部蓋石検出状況 (北から)
- (2) 1号墳第1・第2主体部検出状況 (南から)
- (3) 第1主体部蓋石除去中 (北から)
- (4) 第1主体部蓋石除去中 (南東から)
- (5) 第1・第2主体部 全景 (南から)

図版3

- (1) 1号墳第1主体部 人骨検出状況
(蓋石崩落前) (南から)
- (2) 1号墳第1主体部 人骨検出状況
(清掃後) (南から)
- (3) 1号墳第1主体部 人骨検出状況 (西から)
図版4
- (1) 1号墳第1主体部人骨A・B出土状況 (北から)
- (2) 1号墳第1主体部人骨C出土状況 (南東から)
- (3) 1号墳第1主体部枕検出状況 (北から)
- (4) 1号墳第1主体部人骨A
- (5) 1号墳第1主体部人骨B
- (6) 1号墳第1主体部人骨C
- (7) 1号墳墳丘東西トレンチ土層断面 (南から)
- (8) 1号墳墳丘東西トレンチ西側土層断面 (南から)

図版5

- (1) 1号墳第1・第2主体部掘方検出状況①(南から)
- (2) 1号墳第1・第2主体部掘方検出状況②(南から)
- (3) 1号墳第2主体部検出状況 (北東から)
- (4) 1号墳第2主体部検出状況 (北から)
- (5) 1号墳第2主体部東壁・南壁 (北から)
- (6) I区2面 遺構検出状況 (北から)
- (7) I区2面 S C 07 完報状況 (東から)
- (8) I区2面 S C 07 完報状況 (北東から)

図版6

- (1) II区2号墳 速景 (南から)
- (2) II区2号墳 検出状況 (南西から)
- (3) II区2号墳 検出状況 (南東から)
- (4) II区2号墳 周溝検出状況 (西から)
- (5) II区2号墳 周溝検出状況 (北から)
- (6) II区2号墳 周溝土層断面 (南東から)
- (7) II区2号墳 石室調査前状況 (南から)
- (8) II区2号墳 石室検出状況 (南から)

図版7

- (1) II区2号墳 石室 (東から)
- (2) II区2号墳 石室 (南西から)
- (3) II区2号墳 SX 0 3 出土状況 (西から)
- (4) II区2号墳 SX 0 3 (西から)
- (5) III区3号墳 (南東から)
- (6) III区3号墳 (南から)
- (7) III区3号墳 主体部 (西から)
- (8) III区3号墳 主体部 (西から)

図版8

- (1) III区3号墳 石棺北側裏込 (北から)
- (2) III区3号墳 石棺南側側 (南から)
- (3) III区3号墳 石棺内検出状況 (南から)
- (4) III区3号墳 石棺内検出状況 (北から)
- (5) III区3号墳 鉄刀出土状況①(南西から)
- (6) III区3号墳 鉄刀出土状況②(西から)
- (7) III区3号墳 石棺解体作業中 (南から)
- (8) III区3号墳 主体部掘方検出状況 (西から)

図版9

出土遺物 (1, 2, 3, 9, 10, 13, 14, 16, 39)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成 28（2016）年 6 月 2 日付、農林第 218 号で福岡市西区大字千里字大久保 85-1 の一部他 3 箇地内（開発面積：9948.67m²）における太陽光発電所設置に伴う埋立計画に対する意見について、経済観光文化局埋蔵文化財課長に対し、農林水産局森林・林政課長より照会がなされた。当該地は、今宿古墳群の分布調査で新たに 3 基の古墳を確認し、分布調査報告書では、そのうち 2 基を飯氏古墳群 P 群として報告していた。しかし、遺跡分布地図に分布調査結果が反映されておらず、照会の段階では申請地の大部分が埋蔵地外の扱いであったが、千里深谷 B 遺跡・千里仲里遺跡の隣接地に一部が含まれていたことから、事業主に対し、事前協議と事前審査依頼の提出を求めた。

平成 28 年 6 月 15 日付で、事業主からの事前審査依頼を受理し、現地踏査を実施した。既に伐根までが終了していたが、尾根上および斜面で弥生時代中期の土器片を探集し、また、分布調査で古墳とされた箇所では、その存在が予想され、報告書に反映されなかった箇所でも玄武岩の板石が確認でき、古墳等の存在が予想された。さらに、試掘調査を実施した結果、尾根上で石棺墓や小石室を検出し、西側の谷部でも一部遺物包含層を確認した。既に埋立等に対する農林水産局の許可は下り、着工が決まっていたが、協議の結果、埋蔵文化財への影響が回避できない尾根上の部分を中心とした 950m については記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。なお、調査に先立ち、申請地一帯を千里大久保遺跡として新規に登録を行った。個人事業者による太陽光発電所設置であったため、調査・整理費用には、国庫補助金を充当することとし、平成 28（2016）年 7 月 4 日付で事業主である個人を委託者、福岡市長を受託者として発掘調査事前協議確認書を取り交わし、平成 28（2016）年 7 月 6 日より発掘調査を、翌平成 29 年度に資料整理・報告書作成を行うこととなった。

2. 調査の組織

調査委託 個人

調査主体 福岡市教育委員会（発掘調査：平成 28 年度・整理報告：平成 29 年度）

調査総括 経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課 課長 常松幹雄（28・29 年度）

庶務 同埋蔵文化財課 同課調査第 1 係長 吉武学（28・29 年度）

管理係長 大塚紀宣（28 年度）

同課管理係 横田忍（28 年度）

管理調整係長 藤克己（29 年度）

同課管理調整係 松原加奈枝（29 年度）

事前審査係長 佐藤一郎（28 年度）

本田浩二郎（29 年度）

事前審査係文化財主事 吉田大輔（28・29 年度）

主任文化財主事 加藤良彦（28 年度）

文化財主事 細石朋希（28 年度）

同課事前審査係主任文化財主事 池田祐司（28 年度）

事前審査係文化財主事 吉田大輔（28 年度）

事前審査係文化財主事 吉田大輔（29 年度）

整理担当 同埋蔵文化財課

発掘作業 今村良輔 馬奈木留雄

II. 遺跡の立地と環境

福岡市西区の南西端、博多湾の西寄りには今宿平野と呼ばれる小平野が所在する。その範囲は東西約5km、南北2kmにおよぶ。地形的には糸島平野の沖積扇状地東縁にあたり、高祖山（標高416m）北西麓に位置し、低丘陵とこれに続く段丘部分から構成される。糸島平野は脊振・雷山山系から流れ出す瑞梅寺川・雷山川の両河川とその他の小河川による開析・堆積作用により形成された低地・低位段丘によって構成される。

糸島平野および今宿平野の歴史環境を概観すると、糸島平野の低地、段丘には绳文時代後期から集落が形成され、三雲、周船寺遺跡などで住居跡、埋葬が検出されている。弥生時代には平野中央の丘陵部で住居・墳墓が検出されており、三雲遺跡南小路地区で検出された甕棺からは多數の青銅器・玉類を主とする副葬品が出土しており魏志倭人伝にある伊都國の中心部であったと推定されている。また、平野東側には弥生時代の交易拠点の一つといえる今宿五郎江遺跡なども存在する。さらに、中央丘陵部には、弥生時代から古代にかけて糸島半島の拠点と考えられる元岡・桑原遺跡群が展開している。古墳時代には、中央丘陵部で引き続いだ集落が営まれるほか、今宿平野でも平野部とその背後にあら丘陵部や台地上には、12基の前方後円墳と350基以上の群集墳が営まれている。

平成16年度に統合・追加指定された国史跡今宿古墳群は7基の前方後円墳（山ノ鼻1号墳・若八幡宮古墳・鋤崎古墳・丸隈山古墳・兜塚古墳・飯氏二塚古墳・大塚古墳）からなり、これらの古墳は4世紀初頭から6世紀後葉までの3世紀弱にわたって築造されたもので、古墳時代を通じて同一地域の中で継続的に営まれた首長墓群として全国的に珍しい例である。さらに、三角縁神獣鏡や列島製初現期の鉄製短甲を副葬したものや、初現期の定形化横穴式石室をもつものもみられる点でも重要である。この地城が中国大陆・朝鲜半島との対外交渉の拠点に位置していることを考えると、これらの古墳は九州北部地域における古墳時代の政治動向に止まらず、大陸・半島との対外のみならず、畿内をはじめとする列島各地との交渉・交易などの様相を知る上でも重要なものといえる。6世紀前半以降は、前方後円墳は築かれるものの20~40mの小型のものとなり、立地も丘陵上に移動する。谷上古墳群B-1号墳や飯氏古墳群B-14号墳などがそれにあたる。また、前方後円墳にみられる変化と併行して、丘陵部の群集墳の形成もこの時期より盛んになり、首長の在り方の変化や地域社会の再編などを窺わせる。平野内の群集墳は平成16年から実施された分布・確認調査の結果、500基ほどとなり、西から飯氏・徳永・女原・新開・谷上・相原・本村・焼山・油坂・鋤崎古墳群が分布し、それぞれの古墳群はいくつかの支群からなることが判っている。この分布調査の成果については、『今宿古墳群詳細分布調査報告』(2012 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1138集)を参照されたい。

今回の調査地が含まれる飯氏古墳群は高祖山の北西側の丘陵に広く分布する。丘陵の北側には飯氏二塚古墳・兜塚古墳が立地している。またB群14号墳は全長約24mの前方後円墳で、6世紀中頃に位置付けられている。さらに5世紀代にさかのほる小型古墳群には徳永古墳群I群や谷上古墳群のように首長勢力に連なる中間層の存在が想定され得るものも含まれ、副葬された朝鮮半島製の鍛冶道具や鉄製甲冑などから被葬者の職掌が窺われる。また、古式の須恵器窯の新開窯跡や6世紀後葉以降に増加している鉄滓を供献する古墳等の存在は、群集墳の被葬集團の性格を考えるうえ重要である。群集墳は未調査のものも多いが、調査例をみると6世紀前半頃に築造が始まり、6世紀後半~7世紀後葉に集中して営まれていることが分かっている。

古墳群の分布する高祖山には、古代には対外防衛の拠点的施設として朝鮮式山城である怡土城が築かれ、高祖山西側で土壘・水門・城門が確認され、礎石も遺存し、鬼瓦・平瓦等が出土している。



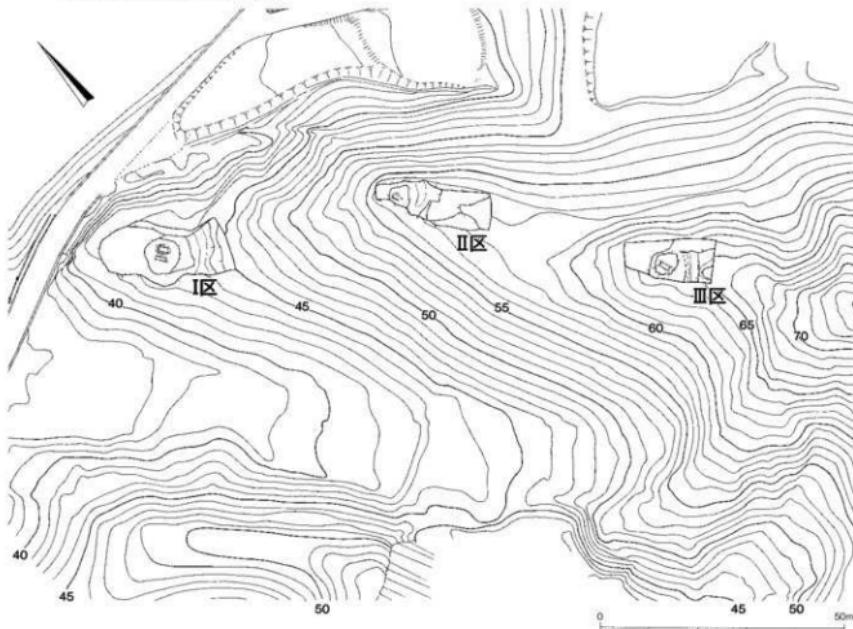
- | | | | |
|------------|------------|------------|------------|
| 1 千里大久保遺跡 | 2 飯氏古墳群P群 | 3 飯氏古墳群I群 | 4 飯氏古墳群K群 |
| 5 飯氏古墳群O群 | 6 千里深谷A遺跡 | 7 千里深谷製鐵址 | 8 千里中里遺跡 |
| 9 飯氏古墳群J群 | 10 飯氏古墳群B群 | 11 飯氏古墳群Q群 | 12 飯氏古墳群R群 |
| 13 飯氏古墳群F群 | 14 千里向川原遺跡 | 15 飯氏古墳群A群 | 16 飯氏古墳群C群 |
| 17 飯氏古墳群D群 | 18 飯氏古墳群T群 | 19 兜塚古墳 | 20 飯氏二塚古墳 |

第1図 周辺遺跡分布図 (1/4,000)

III. 調査の記録

1. 調査の経緯と概要

千里大久保遺跡第1次調査地は、西区大字千里大久保85-1地内に所在する。高祖山北西麓の複雑な尾根上に位置し、調査前は山林で、踏査・試掘調査時には、計画されていた太陽光発電所建設のために、伐採・伐根が終わっており、搬出等のための作業用道路なども掘削されているという状況であった。「I.-1調査に至る経緯」に記したように、当該地は、今宿古墳群の分布調査で新たに3基の古墳を確認し、分布調査報告書では、そのうち2基が飯氏古墳群P群として報告されていたが、この成果が遺跡分布図に反映されていなかったため、照会の段階では申請地の大部分が包蔵地外の扱いであった。このことで、埋蔵文化財の保存や調査に関する事前協議が極めて不十分なものとなってしまったことは、反省すべき事例であり、今後、同様の事例が発生しないように注意を要する。今回の調査に伴い、踏査・試掘調査を実施したところ、尾根上および斜面で弥生時代中期の土器片を探集し、また尾根上の地形変換点で石棺墓や小石室を検出したこと、さらに西側の谷部でも一部遺物包含層を確認したことから、尾根とその西側の谷部を含めた部分を千里大久保遺跡として新規に千里大久保遺跡として登録した。以上のような経緯と工事着手までの期間が迫っていたこともあり、調査範囲や調査期間については、不十分なものであったと言わざるを得ない。調査の対象は、標高約40~65mの尾根上で確認された3基の古墳を中心とした950m²としたが、安全対策や調査の状況から、実際の調査面積は593m²となった。



第2図 調査区位置図および周辺測量図 (1/1,000)

発掘調査は、平成 28（2016）年 7 月 6 日から開始し、尾根の高所から順に、重機による表土剥ぎ取り、人力による遺構検出・掘削を行い、適宜、写真撮影や 1/100 の測量図や 1/10・1/20 の遺構平面図等の図面を作成し記録した。試掘調査において、I 区の 1 号墳と II 区 2 号墳で小石室を、III 区 3 号墳で箱式石棺墓を検出していたため、調査は III 区 3 号墳の主体部から開始したが、尾根の下部から I 区～III 区、古墳についても同様に 1 号墳～3 号墳とした。時間的な余裕がほとんどなかったこともあり、今回の調査は 1～3 号墳までの古墳が主な対象となったが、踏査や試掘時に弥生時代中期の土器が多く採集できたことから、この時期の遺構も残存する可能性も想定し、できる限り古墳周辺の遺構検出を行った。特に多くの遺物が採集できたのは 2 号墳から 1 号墳の位置する尾根の中腹から下部にいたる緩斜面地や西側のやや急な斜面であったため、2 号墳の周溝南側から 15 m ほど続く緩傾斜地では遺構の検出を試みたが、伐採・伐根等による搅乱も受けしており、この部分では遺構は検出されなかった。しかし、1 号墳の調査中に設定した墳丘の断ち割りトレーニチで、墳丘の下に遺物包含層があることが判明し、その下には遺構の存在が想定されたため、古墳の調査後にこの面まで掘り下げ、遺構の検出を実施した。結果的に I 区については 2 面の調査を行い、古墳下面の遺構検出面では、弥生時代中期頃と考えられる堅穴式住居跡や土坑等を調査することができた。

尾根の上方にあたる II 区 2 号墳および III 区 3 号墳から調査を終了させ、終了した部分から順次工事業者へ引き渡し、発掘調査と並行してブルドーザー等による造成工事が開始された。そして、I 区 2 面目の調査を終えた 7 月 23 日に発掘機材等を撤収し、千里大久保遺跡第 1 次調査のすべての工程を完了した。

2. 遺構と遺物

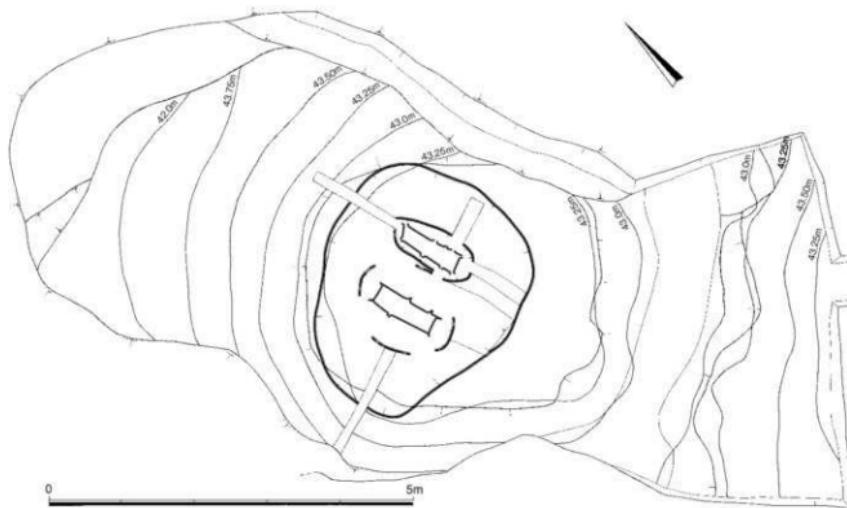
調査は I～III 区に分けて実施し、古墳については 1～3 号墳とした。また検出した遺構には通し番号を付しており、欠番はあるが重複はない。ただし、調査を III 区から実施したため、古墳以外の遺構については、III 区で検出されたものから数字の若い番号が付いている。これらの番号と遺構の種別を示す略号とを組み合わせて表記する。

1) I 区 1 号墳（第 3・4・5 図）

1 号墳は、調査地の立地する北西方向に延びる尾根の先端に近い緩傾斜地の地形変換点付近に古地する。標高は概ね 42～44 m である。試掘調査の段階では、伐採・伐根のための重機の搬入口に近く、そのために荒らされ、わずかに墳丘の高まりが確認できるような状況であり、石室等は完全に埋没していた。調査時に重機によって、表土を除去したところ、今回第 2 主体部として報告する堅穴式小石室を検出した。さらに周辺には玄武岩の板石が散在するような状況であり、これが蓋石であったものと考えられる。第 1 主体部として報告する組合式箱式石棺墓は、この時点では全く確認できていなかったが、第 2 主体部の小石室が墳丘の中心部ではなく、やや東側に寄っていたことや、小石室の西側に墳丘の土とは異なるやや汚れた土が拡がる範囲があったことから、別の埋葬施設がある可能性を考え、この周辺で丹念に検出作業を行ったところ、玄武岩の板石を発見し、もう一つ埋葬施設が存在することが判明した。検出された主体部は組合式箱式石棺で、こちらは蓋石が残った状況であった。石棺内には人骨が遺存しており、南側に 2 体、北側に 1 体の頭骨が残り、その他の骨の残存状態はあまり良くない。調査中に蓋石が割れ、石棺内に落ちるという事態が発生したが、落ちた箇所の人骨は残りが悪かったため、影響は最小限にとどまった。

（1）墳丘（第 3 図）

地山整形 古墳の構築に伴う地山整形は、南東～南側の溝の開削と、墳丘基底面の整地の 2 工程か



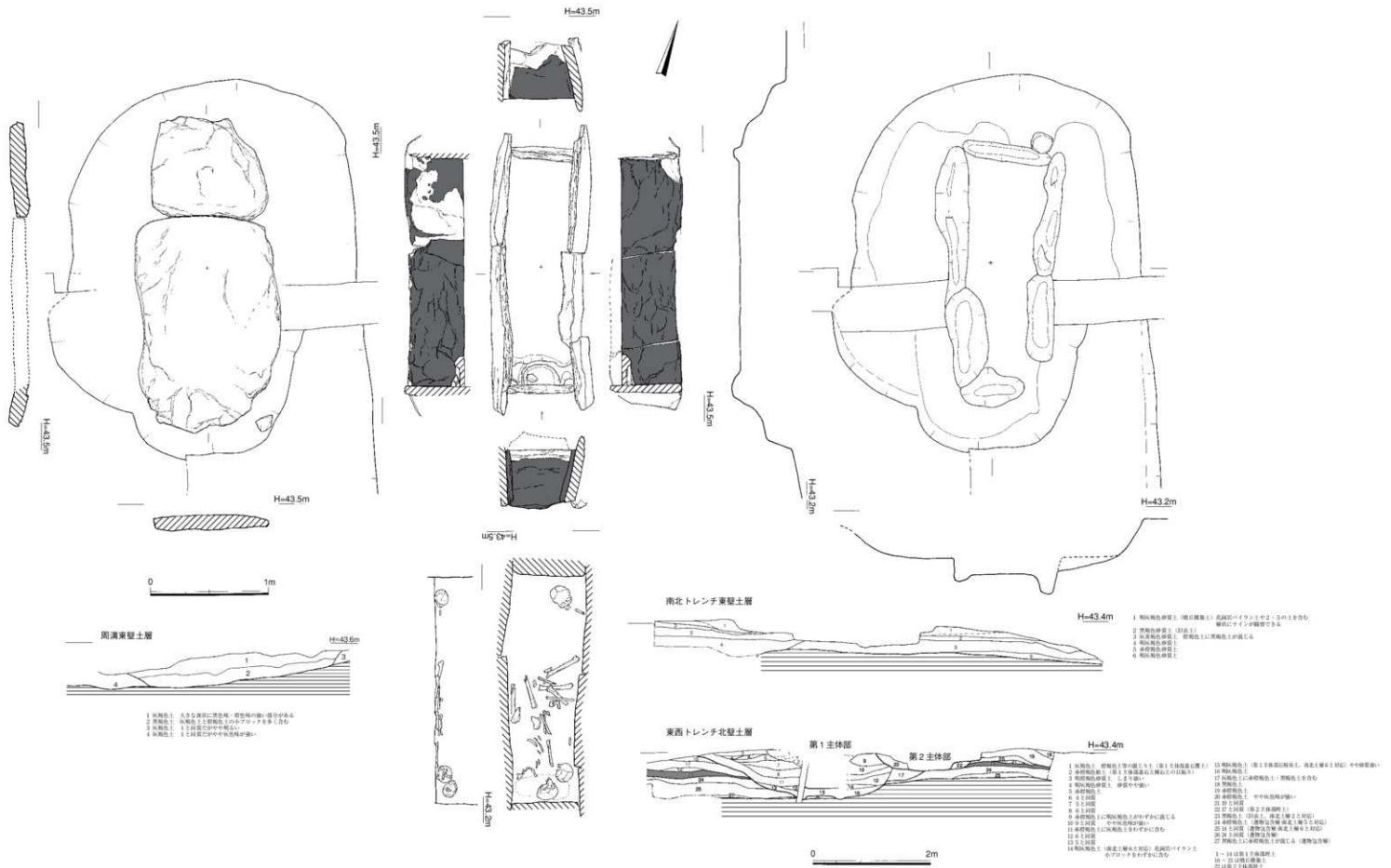
第3図 I区 1号墳丘遺存図および地山整形図（1/150）

らなっている。周溝は、幅3.5～4mほどで、最も深い部分で墳丘から約80cmの比高差がある。周溝は地山である花崗岩バイラン土を削り出しており、この掘削土が墳丘の盛土として利用されているのであろう。周溝の東西端、とくに西端については既に削平され本来の形状は確認できなかったが、おそらく墳丘の南～南西側にかけて半円状をなしていたものと推測される。墳丘および埋葬施設の構築状況の確認を目的に設定した、東西・南北方向のトレンチでは、旧表土とみられる黒褐色土（南北トレンチの2層、東西トレンチの23層）を確認した。墳丘はこの旧表土を東西約7.5m、南北約6.5mの不整梢円形に浅く掘り込み、整地した後に構築されており、現況で最大30cm程度が残存する。墳丘基底面の掘り込みは、地山まで達していないが、第1主体部の箱式石棺墓の掘り方は、この盛土から南北約3m、東西約2.5mの梢円形に掘り込まれ、その内側にさらに石棺の構築材を据えるための幅溝状の掘り込みがある。第2主体部の竪穴式石室の掘り方は、第1主体部の掘り方に重複するように、南北約3m、東西約1mの長梢円形に掘り込まれている。

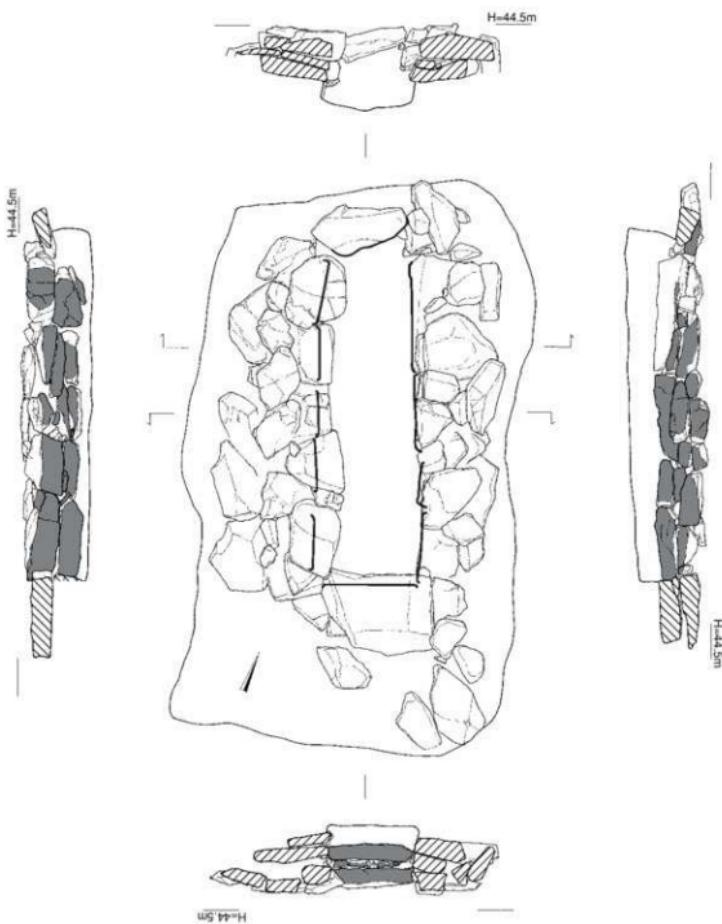
墳丘 墳丘は、断ち割った断面の観察では、比較的丁寧に盛り上げられているようである。墳丘の上部は削平を受けているものと考えられるが、現状では、周溝の底部からの高さは0.8～1mの高さが遺存している。墳丘の平面形は不整円形で、南北約9m、東西8mの規模である。また、周溝を含めた規模は、周溝が墳丘の南側半分に巡っていたと仮定すると南北12m、東西11mの大きさに復元できよう。

(2) 埋葬施設(第4・5図)

第1主体部(組合式箱式石棺)(第4図) 第1主体部は墳丘のやや西寄りに構築された組合式箱式石棺である。主軸方位はN-17°-Wにとり、丘陵の等高線にはほぼ直交する。掘り方は、南北約3m、東西約2.5m、深さ30～35cmの梢円形に掘り込まれ、その内側にさらに石棺の構築材を据えるための幅15～30cm、深さ20～25cm程度の溝状の掘り込みがあり、この部分は地山の花崗岩バイラン土まで

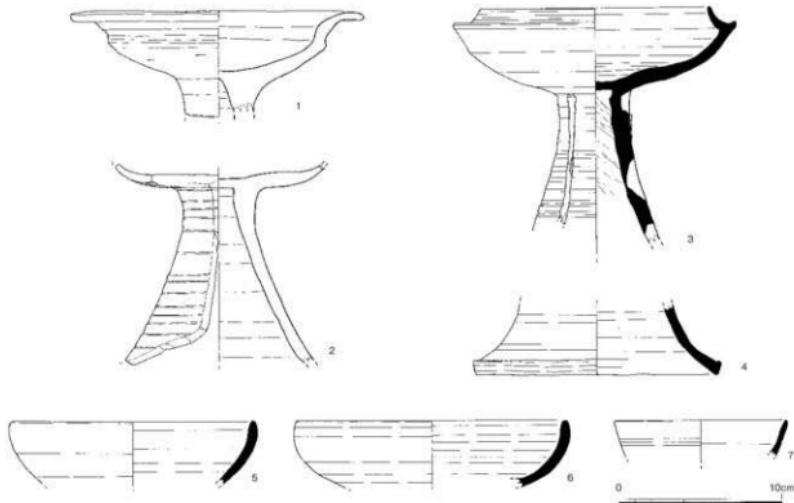


第4図 1号墳第1主体部実測図および埴丘・周溝土層断面図 (1/30・1/60)



0 1m

第5図 1号墳第2主体部実測図 (1/30)



第6図 1号墳 墳丘北側包含層出土遺物実測図（1／3）

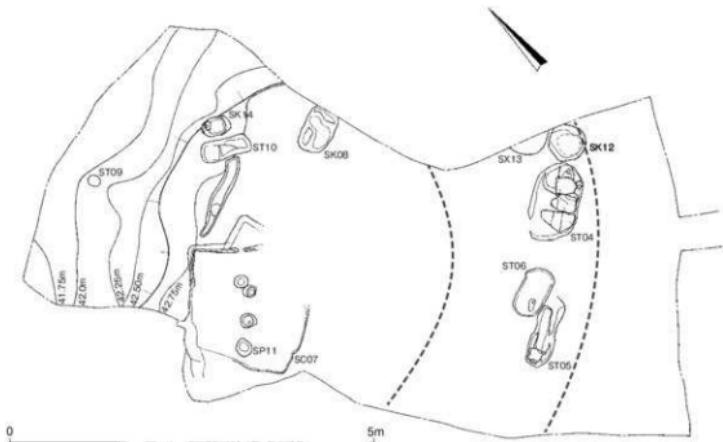
達している。

石棺墓は、玄武岩の板石を立て並べ、幅0.5m、長さ1.9mほどの規模の石棺を構築している。側石の2枚は土圧等により割れているが、本来は長い一枚の板石を用いている。残存していた蓋石も玄武岩の大小2枚の板石であった。小口部分と側石の隙間、蓋石と棺の構築材との間には、赤褐色粘土による目貼りが施されており、石棺の内面および蓋石の内側には赤色顔料が塗布されていた。

石棺内部からは、3体分の人骨が出土し、南頭位に2体（西側からA号・B号人骨）、北頭位に1体（C号人骨）が埋葬されていたが、頭蓋骨は比較的良好残存していたものの、その他の部位については遺存状態が良くなく、欠失している部分も多い。A号人骨の頭蓋骨の下には枕状に形成した粘土が残存していた。なお、石棺内の土については、清掃・掘削後端にかけ、精査したが副葬品等の遺物は出土していない。出土人骨の観察、実測・取り上げについては、福岡市埋蔵文化財センターの上角氏に依頼した。以下に第1主体部出土の人骨に関する上角氏の所見を掲載する。

出土人骨に関する所見 平成28（2016）年7月17日、現地にて人骨の出土状況を観察し、実測を取り上げを行った。

【主体部の構造】埋葬主体部の構造は、組合式の箱式石棺である。長軸をほぼ南北方向に合わせている。側面は薄い板石を1段だけ並べており、表面には赤色顔料が塗られている。床面は土である。蓋石は巨大な薄い石を2枚並べている。石室内への土砂の流入はほとんど見られない。人骨の遺存状況と蓋石の関係に留意したい。石室中央から南側にかけて人骨がよく残っているが、ちょうどこの上を大きいほうの蓋石が覆っていた。人骨の残りが悪い北側は小さな蓋石の下にあたる。そして蓋石の縫ぎ目の下のあたりがもっとも人骨の残りが悪い。蓋石の縫ぎ目から雨水が石室内に浸入したことにより、この部分の人骨だけが集中的に溶けて消失した可能性があることを念頭に置いて、埋葬状態の復元をする必要がある。



第7図 I区2面(1号墳墳丘下)遺構配置図(1/150)

【埋葬状態】人骨は3体埋葬されている。南頭位の(西から順に)A号人骨、B号人骨と北頭位のC号人骨である。A号人骨は伸展葬で、石室中央から西側寄りに埋葬されている。左上腕・前腕と左右の脛骨・腓骨を欠くが、全体的に骨の乱れは少ない。寛骨も部分的に残存するが性別判定は困難である。B号人骨は石室の東南隅に位置する。頭蓋骨とそこから20cmほど北に上腕骨と思われる骨片が残るのみである。頭蓋骨は前頭部から頭頂部にかけて赤色顔料が付着している。C号人骨は石室の東側寄りに北頭位の屈葬で埋葬されている。頭蓋骨と左鎖骨、下肢骨と骨盤の一部(恥骨弓付近)が残っている。上肢骨と胴部の椎骨・肋骨等はことごとく欠いている。しかし、C号人骨の下半身の骨には乱れがなく、頭部との位置関係も不自然ではない。C号人骨の上半身の骨の欠失は、その隣に位置していたであろうA号人骨の膝より下の骨の欠失とともに、蓋石のすき間から浸入した雨水によって溶けて消失したものと推測する。

3体の埋葬の順序であるが、頭蓋骨等の一部の骨しか残存しないB号人骨が初葬である。追葬時の骨の片付け、移動を受けている。次に、A号人骨とC号人骨は共に埋葬後の人為的な骨の乱れは見られず、相互の骨の重なりもない。しかし、C号人骨の屈位の腰から下肢のかけての骨が石室のほぼ中央に位置しており、伸展葬であるA号人骨の下肢が、そのC号人骨を避けるように、意図的にやや西壁側に寄せて埋葬されている。よってC号人骨の埋葬後にA号人骨が追葬されたものと推測する。つまり、埋葬の順序はB号→C号→A号である。

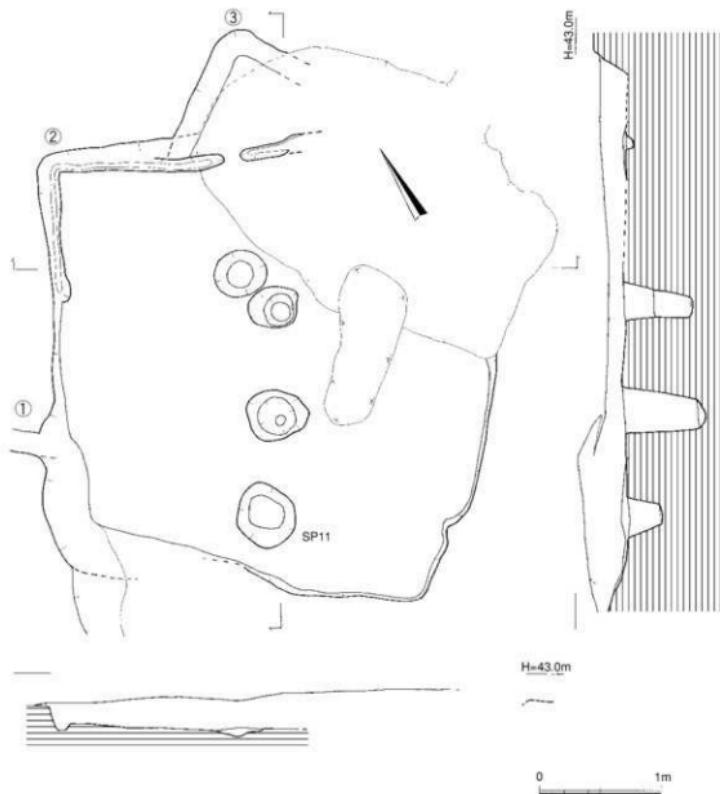
【鑑定】各人骨の性別及び年齢について簡易の鑑定を行った。性別については、骨盤での鑑定ができないため、主に頭蓋骨の形状と四肢骨の筋線の発達具合をもって判定した。また、年齢については歯の咬耗度を主属性、頭蓋骨縫合を従属性として判定した。

A号人骨は、男性で老年(60代～)である。B号人骨は、女性で成年(20～30代)であろう。C号人骨は、女性で熟年(40～50代)である。

観察の結果、以上のような所見が得られている。なお、若干の補足説明を加えると、調査中に蓋石が割れ、石棺内に崩落する事態が発生したが、蓋石が落ち込んだ箇所は、人骨があまり残存していない

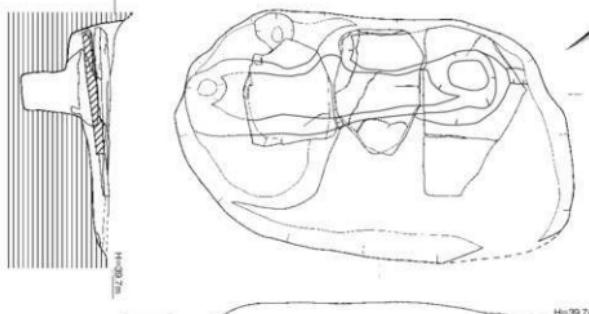
かった部分にあたり、崩落による人骨の破損・移動等の影響は最小限であったと思われる。しかし、落ち込んだ石により、またはこれを取り除く際に、本来の位置から移動してしまった骨もあることは否めない。蓋石崩落前の石棺内の状況は写真図版3（1）に示した、蓋石の隙間から撮影した写真に捉るしかないが、C号人骨の下肢骨が若干移動していることは明らかなもの、全体的にはほぼ原位置を留めているものと考えてよいだろう。

第2主体部（竪穴式石室）（第5図） 第2主体部は、墳丘のやや東寄りに構築された竪穴式石室で幅0.5m、長さ2mほどの規模をもつ。主軸方位をN-22°-Wにとり、第1主体部とは並行する。掘り方は、第1主体部の掘り方に重複するように、南北約3m、東西約1m、深さ20～25cmの長楕円形形状に掘り込まれている。石室は、20～60cmの花崗岩を積んで構築されており、側壁は2～3段分、小口側については北壁が1段、南壁は3段分が残存する。第1主体部との比高差を考えると、石室は

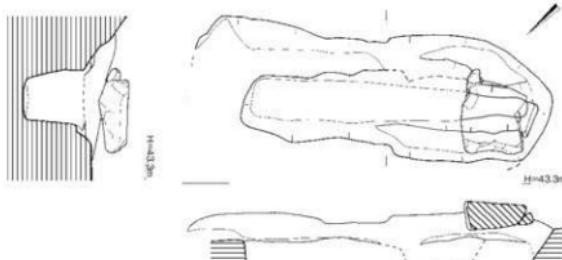


第8図 SC 07 実測図（1/40）

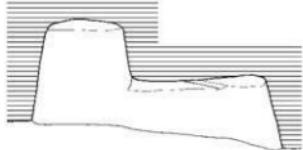
ST04



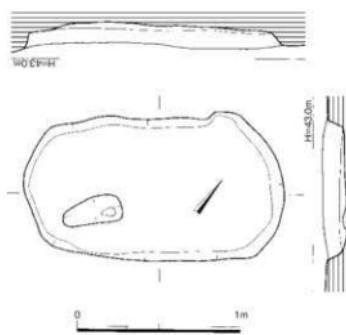
ST05



ST10



ST06



第9図 ST 04・05・06・10 実測図 (1/30)

本来この高さまでのものであったと推測される。床面については明確ではないものの、基底石とほぼ同一レベルか少し低い程度であるものと考えられる。そのため、第5図に示した床面については、掘り過ぎている可能性がある。蓋石は残存していなかったが、石室の周辺には玄武岩の板石の破片が散乱していたため、これらが蓋石であったと考えられる。石室側壁および南壁の内面には赤色顔料が塗布されており、小口側北壁では観察できなかったが、本来は内面全体に塗布されていたものか。出土遺物はない。

(3) 周溝内の遺構（第9図）

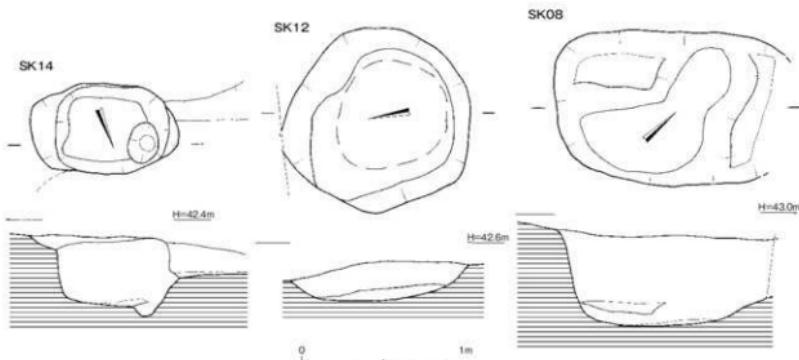
1号墳の南東～南側に掘削された周溝内では、2基の石蓋土坑墓が検出された。いずれも周溝に沿うように、等高線に平行する形で営まれる。

S T 04 (第9図) 周溝内の東寄りに位置する。薄い3枚の板石が蓋石として置かれている。主軸方位はN 30°・Eにとり、二段掘りで、一段目が長軸2.4m、短軸1.5m、深さ0.1～0.3m、二段目が南寄りに掘られ、長軸1.9m、短軸0.5m、深さ0.3mを測る。最も大きな板石がある方が頭位であると推測される。出土遺物はない。

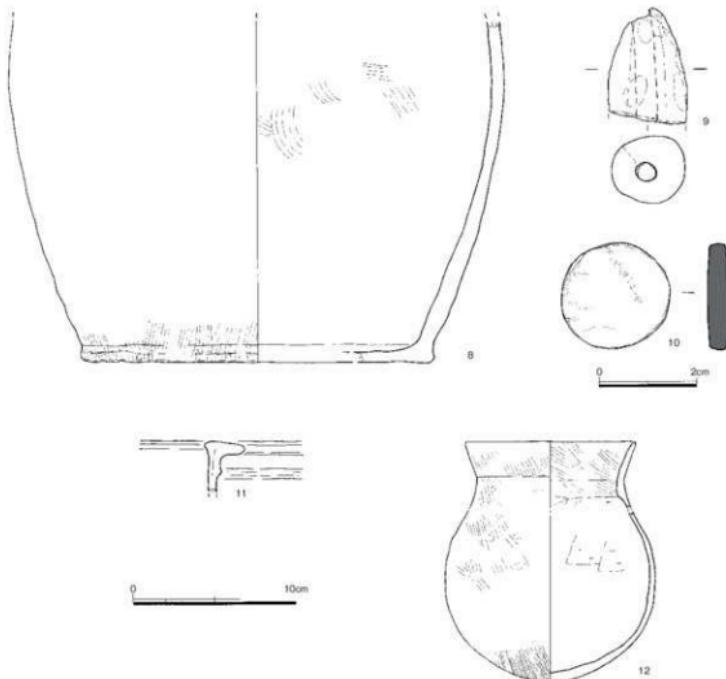
S T 05 (第9図) 周溝内の西寄りに位置する。やや厚い板石とこれを安定させるために置かれた小型の石が2石ある。主軸方位はN 43°・Eにとり、やや掘り方が曖昧ではあるが二段掘りで、一段目が長軸約2.1m、短軸0.6～0.7m、深さ0.15～0.2m、二段目は南寄りに掘られ、長軸1.7m、短軸0.4～0.5m、深さ0.4～0.5mを測る。石が置かれ、掘り込みの幅が広い西側が頭位と推測される。遺物は出土しなかった。

(4) 墳丘北側遺物包含層（第6図）

1号墳の墳丘を検出する際、北側の斜面で土師器高坏や須恵器高坏や坏等の遺物が出土する地点が



第11図 SK 08・12・13実測図（1/30）



第12図 ST09・SK08・SX13および墳丘南側トレンチ出土遺物実測図（9・10は1/1、8は1/4、その他は1/3）
あった。重機での掘削中に確認されたため、出土状況の詳細は不明だが、墳丘上の祭祀等で供獻されたものが転落し、溜まったものと推測され、原位置を保っていたものではないと考えられる。

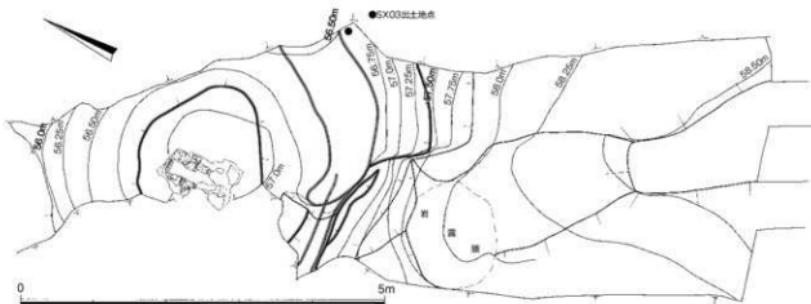
出土遺物 1・2は土師器の高坏で、1は坏部、2は脚部と坏部の一部である。1は坏部の中段から口縁部が大きく外反する。2には3箇所の透かし孔がある。3～7は須恵器で、3・4は高坏、5・6は坏身、7は脚の口縁部とみられる。3の脚部には3箇所の透かし孔が施されるが、いずれも貫通していない部分がある。脚部は細長くラッパ状に開くものであろう。いずれも古墳の構築時期よりもやや時期の下るものであり、祭祀の継続を示すものである。

2) I区第2面(第7～12図)

I区では1号墳の調査中に墳丘の南北・東西に設定したトレンチにおいて、墳丘の下に旧表土および遺物包含層があることを確認した。そのため、古墳の調査終了後墳丘を掘り下げ、墳丘下面の調査を実施した。第2面は地山である花崗岩バイラン土上に設定し、遺構検出を行った結果、不整形方の堅穴式住居跡や土坑等を検出した。第2面の標高は約42～43mで、南東側から北西側へ緩やかに傾斜する。

(1) 堪穴式住居跡(SC)(第7図)

SC07 調査区の北西側に位置する。遺構番号は一つとなっているが、精査した結果、3軒の堅



第13図 II区2号墳墳丘遺存図および地山整形図(1/150)

穴住居跡が重複している可能性が高い。北側にわずかにその掘り方が確認できるもの①、西寄りで主軸方向をN-40°-Wにとるもの②、東寄りで主軸方位をN-35°-Eにとるもの③である。②は概ね南北約3.5m、東西約4mの規模で、北東隅付近で壁溝が確認できた。③は南北約4m、東西4.2mなどの規模である。図示に耐えなかったが、遺構覆土より弥生時代中期の甕の破片が出土した。

(2) 土壙墓(ST)(第9図)

ST 06 調査区の南寄り、1号墳の周溝内に位置する。ST 05の北東側にあり、掘り方に一部重複し、これよりも新しい。第2面の項目でなく、周溝内の遺構として報告すべきものと思われる。主軸方位はN-127°-Wにとり、長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.15mを測る。本来はもう少し、深いものであった可能性が高く、周溝の埋土から掘り込まれていたとすると、周溝の調査の際に上部を掘り下げてしまったものと考えられる。出土遺物はない。

ST 10 調査区の北側に位置する。主軸方位はN-102°-Eにとり、長軸1.5m、短軸0.5~0.6mを測る。西側が深く掘削され、二段掘りとなっており、西側の深いところで検出面からの深さ0.67m、東側は0.4mである。遺物は出土しなかった。

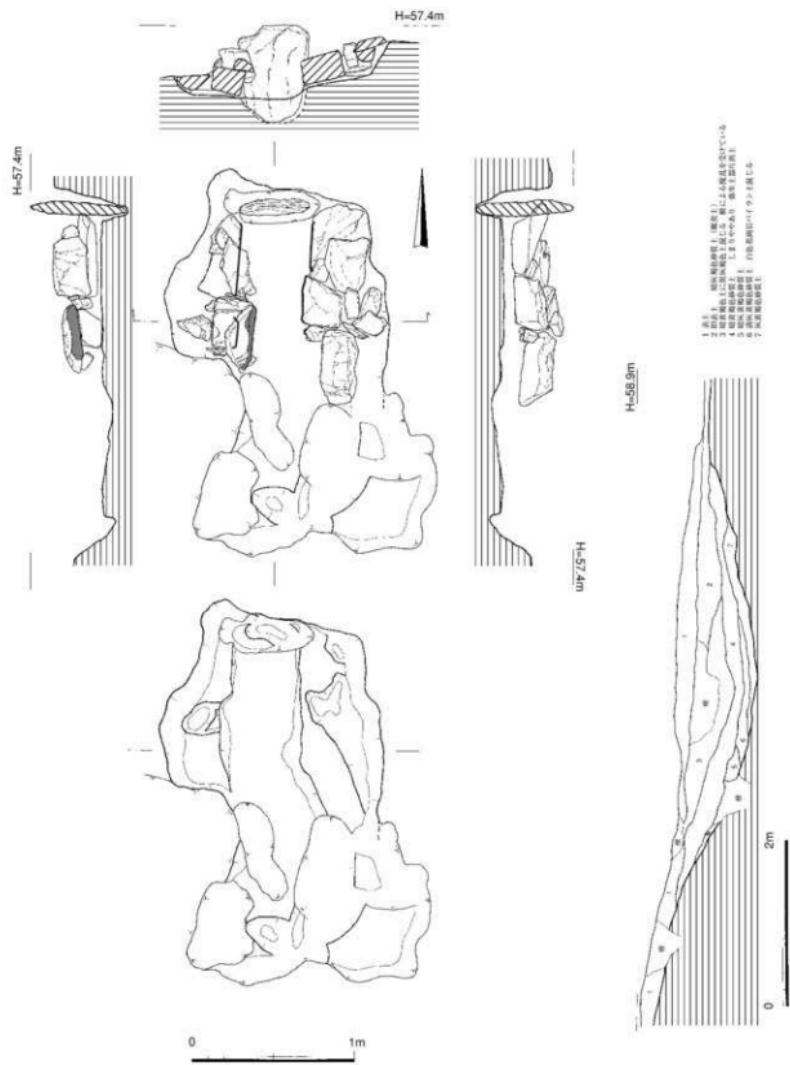
ST 09(第10図) 調査区の北側に位置し、1号墳の墳丘斜面に掘り込まれている。土壙墓の項目に含めたが、墓というよりは埋納遺構と言うべきか。底を打ち欠いた甕の底部が、径0.35m、深さ0.18cmほどが残存する平面円形の掘り方の中に据えられた状態で出土した。甕の上部は検出面よりも高いため、墳丘がある程度埋没した段階で掘り込まれたものであろう。出土した甕から近世以降のものと考えられる。また、甕の内部からは混入したものとみられる土錐が出土している。

出土遺物(第12図) 8はST 09出土の甕で、底部は打ち欠かれた状態である。外面底部付近と胴部内面には縦方向の刷毛目が残る。9は土錐で、ST 09の埋土内から出土した。全体の半分程は消失している。

(3) 土坑(SK)(第11図)

SK 08 調査区の北東寄りに位置し、東端は調査区外に延びる。主軸方位はN-40°-Eにとり、平面形は長楕円形を呈し、長軸は確認できた部分で約13m、短軸は1m、深さは0.4~0.6mを測る。埋土中から弥生時代中期前半の甕口縁部片が出土した。

SK 12 調査区の南東端付近、1号墳墳丘内に位置しており、ST 04と接している。埋土は灰褐色~褐色土であり締まらない。主軸はN-8°-Eにとり、平面形は不整な円形を呈する。南北約1.2



第14図 2号墳主体部実測図および周溝土層断面図（1/30）

m、東西 1.1 m、深さ 0.2 m を測る。ST 04 と比較的近接した時期のものとみられ、上部は周溝の調査時に掘り下げてしまった可能性がある。遺物は出土していない。この SK 12 の北側に隣接して SX 13 が検出された。明確な遺構かどうかが判断できなかったが、埋土は淡黒褐色土で、平面円形を円形を呈する。埋土中から、土器甕が出土した。

SK 14 調査区の北側に位置する。平面形は長楕円形を呈し、主軸方位は N -120° -E にくる。規模は長軸が 0.9 m、短軸が 0.6 m、深さ 0.4 m を測る。底面の北西隅に平面楕円形の掘り込みがある。遺物は出土しなかった。

出土遺物（第 12 図） 12 は SX13 出土の土器甕である。口縁部はわずかに外反しながら、外に開く。外面には縱方向のハケメ、内面の頸部から胴部までは板状工具によるケズリにより調整される。10 は墳丘上に設定したトレーンチで出土したため、遺物包含層出土として報告する。砂岩製の紡錘車未製品とみられ、穿孔はなされていないが、外面には細かい研磨痕が観察できる。

3) II 区 2 号墳（第 13・14・15 図）

2 号墳は、調査地の立地する北西方向に延びる尾根の中腹に近い緩傾斜地の地形変換点付近に占地する。標高は概ね 48 ~ 50 m である。試掘調査の段階では、伐採・伐根のために荒らされ、わずかに墳丘の高まりが確認でき、石室等は花崗岩の石材が集積された状況であった。表土と動いた石材を除去したところ、堅穴式小石室を検出した。

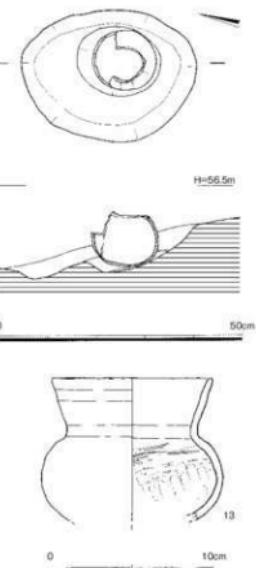
（1）墳丘（第 13 図）

地山整形 古墳の構築に伴う地山整形は、南東～南側の溝の開削および墳丘の削り出しからなっている。周溝は、現状では幅 1.5 ~ 4 m ほどが認識できる。最も深い部分で墳丘から約 80 cm の比高差がある。周溝は地山である花崗岩バイラン土を削り出しておらず、この掘削土が墳丘の盛土として利用したものと考えられるが、現況では墳丘の盛土は明確にしえなかつた。周溝の東西端、とくに西端については既に削平され本來の形状は確認できなかつたが、西側の方がやや狭く、東側に向かって幅が広がっていたようであり、本來の幅は 2 ~ 3.5 m ほどと考えられ、墳丘の南～南西側にかけて半円状をなしていたものと推測される。

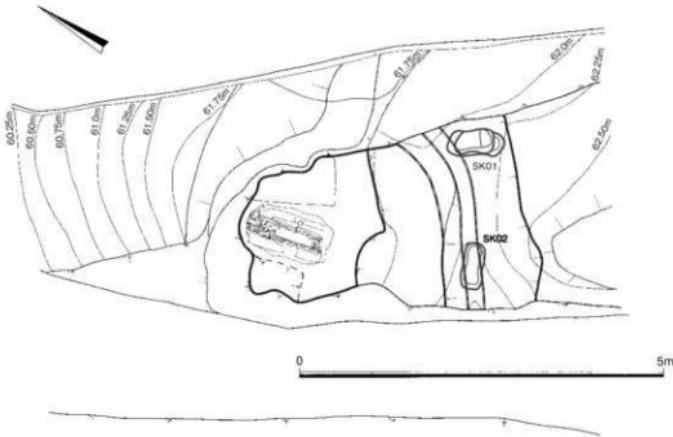
墳丘 墳丘の上部および西側の 1 / 3 程度、東側も大きく削平され、あるいは崩れている部分もあるが、現状では、周溝の底部からの高さは 0.8 ~ 1 m の高さが遺存している。その大部分を地山を削り出すことで構築し、周溝を削った際の掘削土を上部に盛土していたものと考えられる。墳丘の平面形は不整円形になるものと考えられ、南北約 4 m、東西 4 m ほどが遺存する。また、周溝を含めた規模は、周溝が墳丘の南側半分に巡っていたと仮定すると南北 10 m、東西 9 m ほどに復元できよう。

（2）埋葬施設（第 14 図）

堅穴式石室 墳丘のやや西寄りに構築されているものと考えられる。主軸方位は N -3° -W にとり、丘陵の等高線にはば直交する。掘り方は、明確ではなく、また伐採・伐根等により半分程度は削平さ



第 15 図 II 区 SX 03 実測図
および出土遺物実測図 (1/10・1/3)



第16図 III区 3号墳埴造存図および地山整形図（1/150）

れており、本来の規模は不明である。現状で南北約17m、東西約0.5mが残存し、花崗岩の石材が基底部一段分のみが残存する。平面形は不明瞭だが、概ね隅丸長方形を呈し、長軸約22m、幅0.7mが確認できる。また、北側の小口部分については、板材傾いた状態で検出されたが、元の状況に復元した状況で図化した。なお、東壁の南端の一石は原位置を保っていない。石室の内面の一部には赤色顔料が残存しており、本来は石室の内面すべてに塗布されていたものと推測される。また、検出時には、石室の構築材とみられる花崗岩の石材や薄いが大きめの玄武岩の板石も集積された状況であり、これらの板石は蓋石であったものと考えられる。石室内からは遺物は出土しなかった。

(3) 周溝内の遺構

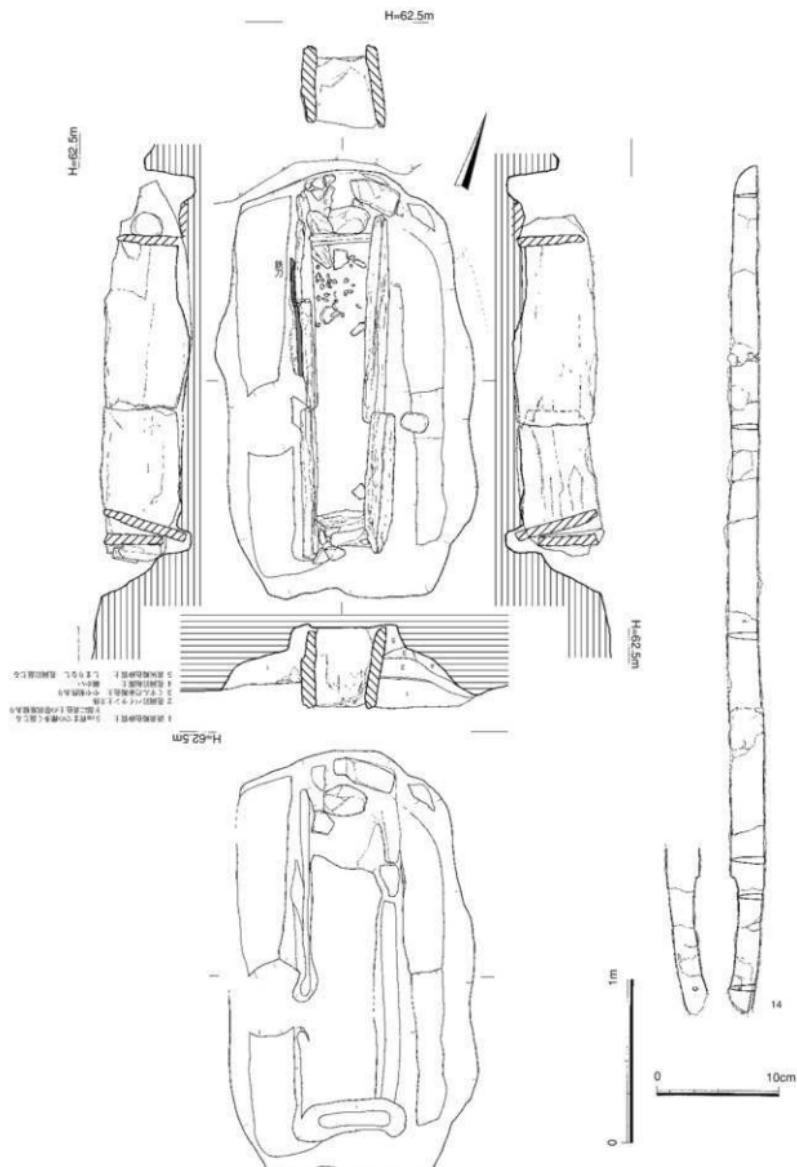
2号墳の南東～南側に掘削された周溝内では、土師器の小型丸底壺が検出された。

SX03 (第15図) 周溝内の東端に位置する。平面円形の掘り方をもち、その中に小型丸底壺が埋置されていた。口縁部と胴部の一部欠損している。この壺には赤色顔料が充填されており、分析の結果ベンガラであることが確認された。出土状況から、周溝を掘削した後、葬送儀礼の一環として埋納されたものと考えられる。

出土遺物 (第15図) 13はSX03に埋納されていた小型丸底壺である。口縁部は直線的にわずかに外に開く。内面頸部下には横方向のハケメと幅の狭い板状工具によるケズリが確認できる。胴部下半には指頭圧痕が密に残る。5世紀中葉頃のものと考えられる。

(5) III区3号墳 (第16・17図)

3号墳は、今回の調査地で確認された古墳の中では最高所に占地する。北西方向に延びる尾根の先端部分に近い地形変換点にあり、標高は概ね61～62mである。試掘調査の段階では、伐採・伐根の重機の通路の開削により、既に西側や墳丘の上部全体が削平を受けている状況であり、墳丘の高まり



第17図 3号墳主体部実測図および出土鉄刀実測図（1/30・1/4）

は確認できたが、埋葬施設は完全に埋没していた。調査時に重機によつて、表土を除去したところ、組合式箱式石棺墓を検出した。蓋石は残存していない。

(1) 墳丘（第16図）

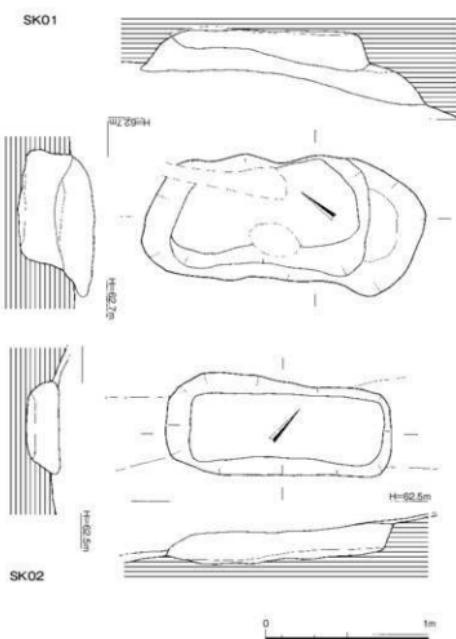
地山整形 古墳の構築に伴う地山整形は、南東～南側の溝の開削と、墳丘の削り出しがからなっている。周溝は、幅3mほどで、最も深い部分で墳丘から約70cmの比高差がある。周溝は地山である花崗岩バイラン土を削り出しており、この掘削土が墳丘の盛土として利用されていたものと考えられるが、明確な盛土は確認できなかった。周溝の東西端とともに既に削平され本来の形状は確認できなかつたが、おそらく墳丘の南～南西側にかけて半円状をなしていたものと推測される。

墳丘 墳丘の上部および西側を中心に大きく削平を受けているが、現状では、周溝の底部からの高さは0.7～0.8mの高さが遺存している。墳丘の平面形は円形になるものと考えられ、現状では南北約4m、東西5m程が残存する。また、周溝を含めた規模は、周溝が墳丘の南側半分に巡っていたと仮定すると南北10m、東西10mほどの大きさに復元できよう。

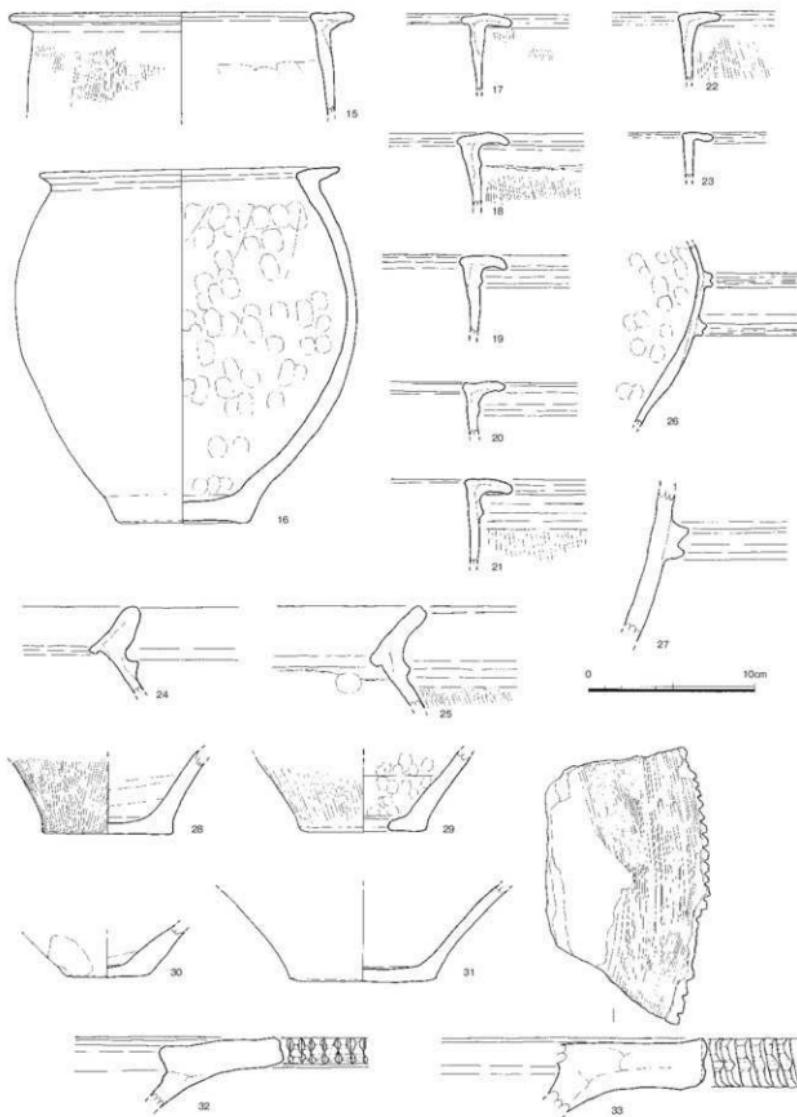
(2) 埋葬施設（第17図）

組合式箱式石棺 墳丘のはば中央部に構築されているものと推測される。主軸方位はN-19°-Wにとり、丘陵の等高線にはば直交する。石棺の掘り方は、南北約3m、東西約2.5m、深さ30～35cmの椭円形状に掘り込まれ、その内側にさらに石棺の構築材を据えるための幅15～20cm、深さ20cm程度の溝状の掘り込みがある。石棺墓は、変成岩の薄い板石を立て並べ、幅0.5m、長さ1.9mほどの規模の石棺を構築している。側石の2枚は土塗等により削られているが、本来は長い一枚の板石を使用している。小口側の北壁は板石1枚が立てられ、その下部に10～30cm程度の玄武岩・花崗岩の石材が置かれ裏込めとしている。南壁は変成岩・玄武岩の板石を2枚並べ、その隙間には裏込めとして数石が据えられており、南北で構築方法に違いがみられる。また、南壁には赤色顔料が付着しており、石棺内部全体に塗布されていた可能性がある。石棺内部からは、遺物は出土しなかつたが、北西側の棺外から石棺に接して鉄製直刀が出土した。切先を北西に向け、刃側を石棺側にして副葬されていた。

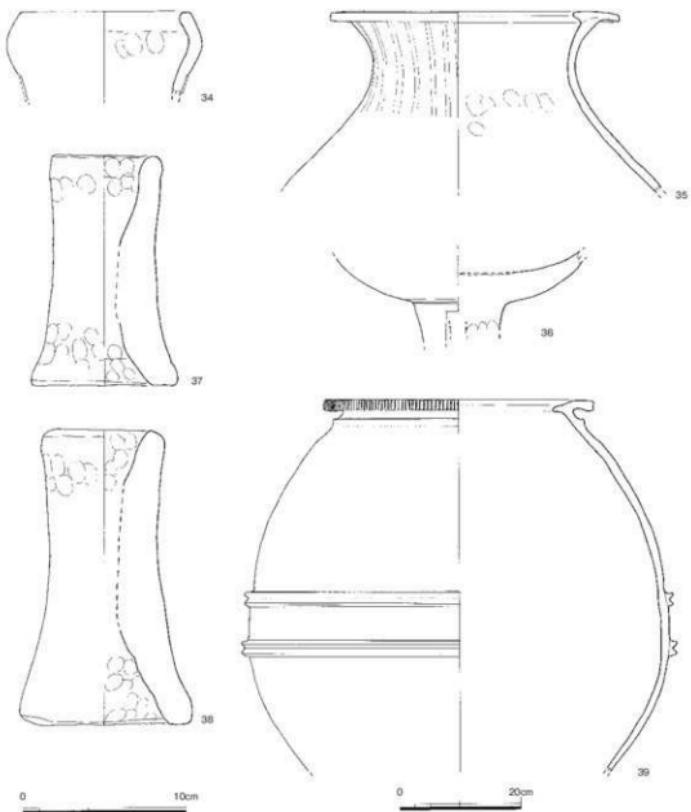
出土遺物（第17図） 14は直刀で、3号墳主体部の組合式箱式石棺外から出土した。全体に錆に覆われているが、ほぼ完形で全長は69.2cm、刀身の幅は約3cmである。棟は平造で、茎へ棟側が緩



第18図 III区 SK01・02 実測図 (1/30)



第19図 試掘調査出土遺物および表探遺物実測図① (1/3)



第20図 試掘調査出土遺物および表探遺物実測図② (39は1/8、その他は1/3)

やかに移行するのに対し、刃部と茎部には段を有する関がある。茎部の先端はわずかに欠失している。目釘孔は錆で判然としないものの1箇所確認できる。

(3) 周溝内の遺構（第18図）

3号墳の南東～南側に掘削された周溝内では、2基の土坑墓が検出された。1基は周溝に直交するよう、1基は沿うような形で営まれる。

S T O 1 (第18図) 周溝内の東寄りに位置する。主軸方位はN-37°-Wにとり、二段掘りで一段目が長軸3.2m、短軸0.7～0.8m、二段目が長軸1.2m、短軸0.6mで、深さ0.5mを測る。出土遺物はない。

S T O 2 (第18図) 周溝内の西寄りに位置する。主軸方位はN-40°-Eにとり、長軸約1.4m、短軸0.5～0.6m、深さ0.2m程を測る。遺物は出土しなかった。

(5) 試掘調査出土遺物および表探遺物

今回の調査に際しては、踏査や試掘調査を実施したが、その際に出土・表探した遺物を紹介する。遺物が多く出土したのは、尾根の中腹（II区）から下段付近（I区）と西側の谷部で、谷部では、完形の壺や器台等多くの遺物が出土した。

出土遺物（第19・20図） 15～23・24・25は、弥生土器壺の口縁部である。概ね断面T字状・L字を呈し、口縁部下に一条の低い突帯が巡るものが多い。28～31は壺あるいは壺の底部で、29は焼成前に穿孔されている。32～35は壺の口縁部である。32・33は広口壺で口唇部中央を凹ませた後、刻み目が施される。33はミガキが顯著で、外面には赤色顔料が塗布される。36は外面に赤色顔料が施され、暗文風のミガキが施される。39は壺棺で、全体の4分の1程度が残存する。焼き歪みのためか、やや口がすぼまり、胴部が張ったような器形となっているが立岩式の範疇で捉えてよいものと考えられる。調査地で出土した遺物は概ね弥生時代中期後葉～末にかけてのものでまとめており、遺構から出土したものではないが、集落や墓地の存在を示唆するものと言える。

IV. 結語

今回の調査では、3基の古墳と弥生時代中期頃の竪穴式住居や土坑等を検出した。古墳に伴う遺物はほとんど出土しなかったが、3号墳では棺外副葬の直刀が、2号墳では周溝内に埋納されたベンガラ入り小型丸底壺が、1号墳でも周溝内で検出された土坑状遺構から土師器壺が出土した。1・2号墳周溝内で出土した遺物について、それぞれ、古墳の築造時期とほぼ同時期のものと考えると、3基の古墳の築造時期は3号墳が5世紀前葉頃、2号墳が5世紀中葉頃、1号墳が5世紀後葉頃に位置付けられるものと推測され、尾根の高所から順に築造されたものと考えられる。また、1号墳の台1主体部からは3体分の人骨が出土し、追葬が行われていることが想定できるものであり、人骨の詳細な分析を実施することで親族関係等を示す貴重な資料を得られたと言ってよい。さらに、第1主体部と第2主体部は重複し、埋葬施設の構造が、組合式箱式石棺と竪穴式石室がそれぞれ採用され、最も早く築造された3号墳の主体部は組合式箱式石棺、2号墳は竪穴式石室が用いられており、これらが選択された意味が被葬者像や、これらの古墳の関係を考えていく上で考慮すべき要素であろう。

調査を実施した3基の古墳は、調査地の周辺で本格的に群集墳が築造され始める6世紀前半に先行する小型古墳群として位置づけられる。周辺の古墳群でも5世紀代にさかのばる小型古墳群には徳永古墳群I群や谷上古墳群のように首長勢力に連なる中間層の存在が想定され得るものも含まれ、副葬された朝鮮半島製の鍛冶道具や鉄製甲冑などから被葬者の職掌が窺われるものもある。今回の3基の古墳の被葬者についても、今後の検討課題ではあるが、前方後円墳を築造する首長勢力に連なるような中間層を被葬者として想定し得るものであり、周辺の地域社会の動向や情勢が窺われる意味で重要である。また、1号墳墳丘下で検出した、弥生時代中期頃の竪穴式住居や土坑等や試掘調査および踏査時に採集した弥生時代中期後葉～末頃の遺物群の存在は、尾根上や谷部周辺にこの時期の集落や墓地が存在したことを示唆するものである。2号墳・3号墳周辺では、この時期の遺構は確認されなかつたものの、古墳の築造時に既に削平されてしまった可能性が高い。太陽光発電所建設のための造成工事により、尾根部分は大きく削平されたが、谷部については、盛土の下に少なくとも遺物包含層は残された状況であるので、今後、新たな開発の際には調査が必要であり、その成果にも期待したい。

写 真 図 版



写真図版 1



(1) 調査前の状況 遠景（北西から）



(2) 調査地点 全景（南東から）



(3) II区および西側斜面（北西から）



(4) 西側斜面および谷部（南東から）



(5) I区1号墳および周溝検出状況（南東から）



(6) ST 05 検出状況（南東から）



(7) ST 04 検出状況（北西から）



(8) ST 04・05 完掘状況（北東から）



(1) 1号墳第1主体部蓋石検出状況（北から）



(2) 1号墳第1・第2主体部検出状況（南から）



(3) 第1主体部蓋石除去中（北から）



(4) 第1主体部蓋石除去中（南東から）



(5) 第1・第2主体部全景（南から）

写真図版3



(1) 1号墳第1主体部 人骨検出状況(蓋石崩落前)(南から)



(2) 1号墳第1主体部 人骨検出状況(清掃後)(南から)



(3) 1号墳第1主体部 人骨検出状況(西から)



(1) 1号墳第1主体部人骨A・B出土状況（北から）



(2) 1号墳第1主体部人骨C出土状況（南東から）



(3) 1号墳第1主体部枕検出状況（北から）



(4) 1号墳第1主体部A号人骨



(5) 1号墳第1主体部B号人骨



(6) 1号墳第1主体部C号人骨



(7) 1号墳墳丘東西トレンチ土層断面（南から）



(8) 1号墳墳丘東西トレンチ西側土層断面（南から）



(1) 1号墳第1・第2主体部掘方検出状況①（南から）



(2) 1号墳第1・第2主体部掘方検出状況②（南から）



(3) 1号墳第2主体部検出状況（北東から）



(4) 1号墳第2主体部検出状況（北から）



(5) 1号墳第2主体部東壁・南壁（北から）



(6) I区2面 遺構検出状況（北から）



(7) I区2面 SC 07 完掘状況（東から）



(8) I区2面 SC 07 完掘状況（北東から）



(1) II区2号墳 遠景（南から）



(2) II区2号墳 検出状況（南西から）



(3) II区2号墳 検出状況（南東から）



(4) II区2号墳 周溝検出状況(西から)



(5) II区2号墳 周溝検出状況（北から）



(6) II区2号墳 周溝土層断面（南東から）



(7) II区2号墳 石室調査前状況（南から）



(8) II区2号墳 石室検出状況（南から）

写真図版7



(1) II区2号墳 石室（東から）



(2) II区2号墳 石室（南西から）



(3) II区2号墳 SX 03 出土状況（西から）



(4) II区2号墳 SX 03（西から）



(5) III区3号墳（南東から）



(6) III区3号墳（南から）



(7) III区3号墳主体部（西から）



(8) III区3号墳主体部（西から）



(1) III区3号墳 石棺北側裏込（北から）



(2) III区3号墳 石棺南壁側（南から）



(3) II区3号墳 石棺内検出状況（南から）



(4) II区3号墳 石棺内検出状況（北から）



(5) III区3号墳 鉄刀出土状況①（南西から）



(6) III区3号墳 鉄刀出土状況②（西から）



(7) III区3号墳 石棺解体作業中（南から）



(8) III区3号墳 主体部掘方検出状況（西から）



13



1



2



3



16



39



9



10



14

報告書抄録

ふりがな	せんりおおくぼいせき 1 -せんりおおくぼいせき だい1じちょうさほうこく-							
書名	千里大久保遺跡 1							
調査名	- 千里大久保遺跡第1次調査報告 -							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1334集							
著者名	吉田大輔							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2018年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
千里大久保遺跡	福岡県福岡市西区 大字千里大久保5-1	市町村	遺跡番号	33° 33' 65"	130° 14' 59"	20160706 ～ 20160723	593	記録保存調査 (太陽光発電所建設)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
千里大久保遺跡	集落 古墳	弥生時代 古墳時代	古墳、土壙墓、堅穴住居、 土坑、溝、小穴	弥生土器、土師器、須 恵器、土製品、石製品、 鉄製品	3基の古墳を調査。1号墳 第1主体部では3体分の人 骨が出土。3号墳の箱式石 棺棺外で鐵製直刀が出土。			
要約	調査地点は、福岡県立筑前高校の南東側に位置し、高祖山北西麓から南北方向に延びる尾根上にある。3箇所の地形変換部において古墳3基を確認、調査を実施した。すべて円墳と推定され、1号墳は2つの主体部があり、第1主体部は組合式箱式石棺、第2主体部は堅穴式石室である。2号墳の主体部は堅穴式石室、3号墳は組合式箱式石棺である。石室内では遺物は出土しなかったものの、古墳に伴う遺物としては、3号墳石棺墓から竪穴式石室の鐵製直刀が出土し、2号墳の周縁内からはベンガラを充填した小壺が出土した。また、1号墳第1主体部では3体分の人骨を確認した3基の古墳の築造時期は3号墳が5世紀前半頃、2号墳が5世紀後半頃、1号墳が6世紀後半頃に位置付けられるものと推測され、尾根の高所から順に築造されたものと考えられる。調査地の周辺で本格的に群集遺跡が築造され始める6世紀前半に先行する小堅穴式住居や土坑等の存在や試掘調査および踏査時に採集した弥生時代中期後葉～末葉の遺物群の存在は、尾根上や谷部周辺にこの時期の集落や墓地が存在したことを示唆するものである。今回の調査では、当地周辺の弥生時代から古墳時代にかけての土地利用の変遷、集落・墓地の様相を窺い知る成果を得られた。							

千里大久保遺跡 1

—千里大久保遺跡第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1334集

2018(平成30)年3月26日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 有限会社タスク

福岡市中央区赤坂2-2-5

